

Heart × Land 03

こころ宿る地で

なぜか魅せられてしまう、
そして離れられなくなる……。
人のこころにそっと宿る土地がある。
その地で人は創作にはげみ、癒される。
自分だけのLandに生きる人の声に
耳を傾けてみる――。

書家

紫舟 *Siszu*

@奈良県奈良市



仕事と住まいは心の声で選ぶ。

書家という職業の具体像を思い描ける人は少ないだろう。
お習字の先生との区別がつかない人がほとんどに違いない。
ならば一度は彼女の作品に接してみるべきだ。
和紙に描かれた文字が伝える温もりや楽しさ、優しさ。
それはお習字とはまったく違う、アートだ。
心の声に導かれるままに。彼女はアーティストになった。

Text: Akira Yokota Photograph: Yukio Yoshinari

＊ お習字のセンスはないことを
小学3年生で見切った少女

古都と呼ぶには都会になり過ぎた感のある京都から、近鉄電車で南へ。たて込んだ市街地も宇治川を渡るころには途絶え、木津川を渡ると、車窓は新緑に染まった。東西を山に挟まれた盆地を抜け、平城宮の遺跡のど真ん中を走り抜けると、大和の都、奈良だ。

書家の紫舟さんのアトリエは、近鉄奈良駅から歩いてほんの10分足らずのところにある、築100年という古民家。その職業にあまりにもふさわしい道具だてに古風な和服美人を想像するが、あにはからんや。格子戸を開けて私たちを迎えてくれたご本人は、スラリとした痩身にシックな洋装が似合う、現代的な美人だ。それもそのはず、紫舟さんが書家を名乗る前の仕事は、アパレルメーカーの広告宣伝部員。いわゆる最先端の世界の住人だったのである。

その経歴と同様に、作品も、茶室の掛け軸のような伝統的な書体とはかなり異なる。爽やかに、おおらかに人々を見守る青い「空」。疲れた現代人を心の底からホッとさせてくれるような、優しい「癒す」。「楽」はまるで無邪気な子どものように、「涼」は草原を吹き渡る風のように。まるで文字の表す世界をそのまま視覚化したようなタッチと筆蹟は、誰もが子どもの頃に経験したお習字とはまったく異質なものだ。

その才能を買われて、手がける仕事は商品や店舗のロゴタイプから新聞、雑誌の見出し、テレビの番組タイトルにビデオ、DVDのジャケットなど、多岐にわたる。作品をすべて並べていけば、きっと多くの人が「ああ、見たことがある」と思い当たるに違いない。書家という仕事が画家や音楽家と同じようにアーティスト、それもクラシックではなく、コンテンポラリーでクリエイティブな位置にあることにも、あらためて気づくだろう。





東大寺大仏殿裏手の道から二月堂を臨む。アトリエから徒歩15分ほどで現れるこのアングルが紫舟さんのお気に入り。散歩でたびたび訪れるそう。

もちろん、最初からこんな作品が書けたわけではない。四国の商家に生まれた紫舟さんが6歳で始めたのは、普通の「お習字」。しかし、意外なことに彼女は小学校3年生のころには、自分にはセンスがないと見切っていたという。

「賞状もたくさんもらったし、ヘタだとは自分でも思わなかったけれど、お手本のような字を上手に書き上げるセンスはない、と分かったんです」小学校の終わりには七段に達したにもかかわらず、いや、だからこそだったのかもしれない。

「当時は書とお習字の違いもわからないし、お習字が駄目な以上、ほかに何かできることを見つけないと、真剣に思ったんです」

そこで彼女は片っ端からお稽古事を試した。

「日本舞踊にピアノにバイオリン、剣道まで、やりたい、と始めてはフェードアウト。どれもどんなやめ方をしたかさ覚えていないほど身につかなかったけれど、おかげで音楽などの聴覚的なセンスはまったくないことは思い知りました。それよりも、まだお習字や絵画のような視覚的なセンスはあるな、と」

だからお習字だけは高校時代まで続けることができた。理屈ではなく、直感で。彼女は自分の生き方の大きなバックボーンを、当時から掴んでいたのである。

✳️ 何ができるかわからないなら 住みたい街に住んでやろう

自分には何ができるんだろう、という思いは、若者には誰にでもあるだろう。しかし、その答えを見つめることができる者は多くはない。とりあえずできることをやり、選べる道を選ぶ。多くの人がある毎日の積み重ねの結果として、今の生き方や職業に就いているに違いない。紫舟



作品「雪」



紙にはこだわる。子供の頃から紙にはうるさく、手漉き紙しか使わなかったという。紙屋から「本当に分かるのか」と試されて、漉いた職人まで言い当てたとか。

さんもそうだった。高校を卒業した彼女は「英語が得意だったから」大阪の外国語大学に入り、卒業後は先述のパラレルメーカーに就職する。その理由がふるっている。

「神戸のポートアイランドで働いて、海が見える部屋に暮らそう、とポートライナー(ポートアイランドを走る新交通システム)に乗って、車内から看板を見かけた企業を受けて回ったんです。だって、20歳そこそこの自分には、まだ何になればいいのかも、何になれるかも分からないじゃないですか。だったら住みたい街に住もう、とと思って」

その時、東京や大阪は候補にはならなかった。なぜなら、

「方向音痴なのか、少し歩いただけで自分がどこにいるかわからなくなって、迷子になってしまうんです。その点、神戸は山が見えている方が必ず北。分かりやすいじゃないですか」

笑ってはいけない。紫舟さんは大まじめである。ごさかしい計算や理屈ではなく、彼女は自分の心の声のままに行動しただけ。それを浅慮だ短絡だと捕らえるのは、もはや心の声が聞こえなくなった大人の言い訳がましい論理なのだろう。ともかく、そうして入社したメーカーで、彼女はカタログやCMを制作する、花形部門に配属される。

「でも誤算。じつはポートライナーから見えた看板は本店で、本社は神戸市内の山の方。毎日海も見えない地下鉄に乗って通勤するのがイヤで……」

いい加減にしなさい、とあきれられるのもまた大人の理屈。わがまま放題を言っているようだが、紫舟さんはけっしていい加減な社会人生活をしていただけではない。それが証拠に短期間に実力を認められた彼女は、海外ロケやイベントなど、大きな仕事をまかされるようになったのだ。自分には何ができるのか、という問いに、ついに答えをみつけた。それも紛れもなく、自分の能力で。

「たしかに楽しかったし、充実していました。でも……」

✳️ これが天職と気づいたから 素直に心の声に従った

心の声が「オイオイ違うぞ」と言う。そんな経験をしたことがある人は、少なくないかもしれない。仕事は楽しいし、毎日は充実している。傍目にはなんの問題もないはずだ。けれど声が聞こえてくる。「ここは違う。自分のいる場所じゃない」と。

紫舟さんがその声に従ったのは、入社して3年あまりが過ぎたころ。「周囲からはわがままとしか思えなかったと思います。でも、ちょうど大きな仕事が一段落したころ、タイミングが来た、としか言いようがない感じで『そろそろ辞め時かな』と思ったんです」

仕事のアテがあったわけではない。しかし、熟した果実が枝を離れるように会社を辞め、自分と向き合った彼女は、3カ月後、天啓を得る。「自分にとって書家は天職だ、と気づいた」のである。01年2月、書家宣言。

「それで食べて行けるかどうかも分からなかったけれど、やっと天職が見つかった、という気持ちで、身体が変わった、というぐらい楽になったんです。それまで居心地の悪かったものが、ピタッと納まった感じ。たぶんずっとそれを探していて、悶々としてたんだと思います」

もちろんこれも理屈ではない。しかし、本当はずっと聞こえていながらそれまでは自信を持って従うことができなかった心の声に、彼女はその日から、素直に従って生きることに決めたのである。

そこから先の行動は、広告部員の経験が生きた。有名クリエイターや企業をリストアップして作品を売り込む一方で、「とにかく個展を10回やろう、と決めて」精神的に制作に励む。個性豊かなその作品が評価され



るまでには、さほどの時間はかからなかった。

さまざまな仕事舞い込む一方、大きなアートフェアへの出展やパフォーマンスの披露。海外のイベントへの招聘も増えていく。小学生のときに見切ったお習字ではなく、アートとしての書で、彼女はようやく本来の自分のあるべき姿を表現できるようになったのだ。

「ホントは自分で分かっているけど、あえて気づかないようにしていることって、あるじゃないですか」と紫舟さんは言う。「ここに住むべきだ、と感じていても『でも、お金ないやん』とか。でも、書家になる、と決めてから、その気持ちに素直に従えるようになったんです。このアトリエもそう。たまたま道に迷ってやってきた奈良の不動産屋で見つけて『私はここへ来るべきだ』って。神戸で活動していた時には、暇だと『何か予定を入れなきゃ』と焦ったけれど、のんびりしたこの街に来てから変わりました。きっと、当時の私にとっては、この街が必要な場所だったんです」

住む場所と仕事は、感覚で選ぶ。と紫舟さんは言った。今では、それがそのときの自分にとって正しい選択になる自信がある、と。たぶん、次に紫舟さんに会えるのはここではないだろう。東京や大阪でもなく、海の向こうかもしれない。それがどこであっても、彼女が直感に従って行くべき場所、と決めた所に違いない。

強い力を放つ瞳をそらすことなく語る紫舟さんを前に、記者もまた、直感でそう思っていた。



作品「空」



作品「創造人」

profile

紫舟(ししゅう) 愛媛県生まれ 書家。6歳から書を始め、神戸での会社員生活を経て、01年2月1日、書家宣言。01年7月の初個展を皮切りに多数の個展、アートイベントに参加。新聞、雑誌の題字やテレビ、ビデオソフトのタイトル、商品のロゴマークなど活動の幅を広げる。03年よりアトリエ兼自宅を奈良市内に移転。神戸よりスローテンポな街の空気に癒されつつ、世界に書を発信している。5月末よりイタリアでのパフォーマンスにも参加している。

紫舟さん公式ホームページ <http://sisyu.sinayaka.com/>